

島木赤彦

—究極の理想としたもの下—

末竹 淳一郎

五

赤彦は大正三年十一月、八丈島から帰京早々アララギ発行所を小石川白山、御段町一二七に移し、土田耕平、横山重、藤沢古実とともに起居し、着実に編集・経営の体制をととのえた。翌四年二月には長塚節死去、三月に「赤光批評号」発行、これより岩波書店アララギ発売所となる。同月自らも「切火」を発行、六月には「節追悼号」を出すとともに、発行所を再び元のいろは館に移している。

『アララギ』の発行部数が、この年から前年の約倍になり、どうにか経営も順調になった。大正五年結核性睾丸炎を病み、その翌年には郷里より妻子を迎えて一家を構え、淑徳女学校は退職したが雑誌『信濃教育』の編集主任となり、信濃と東京間を往復するという目まぐるしい生活を続けた。年末には病弱であった長男政彦が没し、大正七年には実父浅茅、その翌年には養母縫が死去するなど悲傷事が重なった。七年七月妻子を郷里に帰し、自らは『アララギ』編集のため在京して日夜努力し続けた。やがて茂吉は長崎に赴任し、土屋文明は諏訪高女に赴くというように有力な同人も東京を去り、身辺はとみに寂寥を加えたが、そのような状況の中で、赤彦の『アララギ』内部における指導力が強まったのは自然の成り行きであった。

大正四年に『赤光』、『切火』の批評号を出したおりに、阿部次郎、木下柰太郎、佐藤春夫などの文人や、白秋、夕暮、哀果などにも寄稿を求めたり、赤彦自身は、太田水穂が四年七月に創刊した『潮音』に出詠するなど、盛んに他派との交流を深めている。『アララギ』が拡張していくに従い、外部との対立が激しくなる。茂吉が三井甲之や土岐哀果と論争をするに至り、赤彦も大正六年頃から、白秋、哀果、夕暮、水穂などと筆戦を交えることとなった。赤彦の信州人としての気質や人をたやすく相容れぬ性格は「アララギに籠る方小生等のためによくアラ

ラギの為に勿論よし」(中村憲吉宛書簡、大正七年二月四日)といい「アララギ」の頑固な気質は子規先生の時から根ざして居ります」(山田邦子宛書簡大正五年五月二十八日)などといい、「アララギ」を独自の殻にとじこめた感じを禁じ得ないのである。その功罪についてはここではふれない。

赤彦が「アララギ」独自の立場として掲げたものはどのようなものであったのか。まず写生に関する説は、大正四年十一月『アララギ』の「編輯便」(『アララギ』第八巻第十一号)に平福百穂の画作(屏風絵「朝露」)に深く感動して「我等はただ事象より深く澄み入らんことを冀ふ。益々深く澄み入らんことを希ふがゆゑに、益々深く事象の微動に触れんとするなり。我等の写生斯の如きのみ。」と分明を欠くが、とにかく写生の心構えについて述べ、翌年三月に同じく「編輯便」(『アララギ』第九巻第三号)で「吾人の写生と称するもの、外的事象の描写に非ずして、内的生命唯一真相の捕捉也。表現也。写生の要諦斯の如し。」とここで明確に写生の目的と意義を規定し、「物及び現象の中核に潜み入って、直らにその性命を捉へんとするにあるといふことは、取りも直さず、夫れが作者自身の性命を捉へんとすることである。」(「身上偶話」大正七年三月、『アララギ』第十一巻第三号)と子規の唱えた写生説の内容を拡大したのである。「内的生命」などという生命表現の手段としての写生の解釈は、今までない新しい見解であった。自説の根拠を東洋画論に求め「必ず象物に始まり伝神に至って止まる。夫れ生を写す、性命を写すもの、性命を写すは神を伝ふるのである。」(「写生道一」大正七年五月、「アララギ」第十一巻第五号)「写生の能事は形似に存して形似に終らず。写意はその至極なり。伝神はその究極なり。」(「写生道二」大正七年七月、「アララギ」第十一巻第十号)などと述べ、絵画道と短歌との違いを論じてはいるが、写生に生命表現を付与するために「伝神」もしくは「写意」の概念をこのような形で結びつけたのは、いかにも強引で説得力がなく、写生は観照を主として知的に傾くところから感動をないがしろにするものとして、多(注)くの反論を招く結果となったのである。

さて、一種の詩的技法としての生命表現は、子規以来の、現実的な対象をより客観的に捉えてそれをありのままに表現するという写生説を、多少の相違点はあるにしろ、基本として推し進めたものである。さきに引いた言葉からも、実際の作歌活動にあつては「事象より深く澄み入り」「深く事象の微動に触れんとする」こと、「物及び現象の中核に潜み入り」ることなどが力説されているように、対象の本質に迫ることが必要とされる。その方法として「一心集中する事益々尖鋭微細にして、相触るる事象の中核は益々尖鋭微細を来すべし。」（『アララギ編集 輯便二』大正五年三月、『アララギ』第九卷第三号）と述べ、「一心集中」によって、対象を表現するにあつての基本姿勢としたのである。また、「一心の道」と題し『信濃教育』（大正五年六月号）に発表した論文には「人の世の中で、真正に強いものは『一心』限りないと思ふ。」として、それを「複雑を綜合し統一した力」「鍛錬した力」「冴え入った力」「意志の威力」などと呼んでいる。

単純化という問題に関しては「吾人の感情は多く忍び深く蔵する時、初めて人を動かすの力となつて行住坐臥に現るるの場合が多い。」（『写生道』、『アララギ』大正七年五月第十一卷第五号）という考えに立つて、感情を直接表すよりも、むしろ具象的な表現の内部にとどめておくべきとの主張を基底となし、「今の予を以て短歌と写生との関係を巧へしむるは、則ち密より疎に入らんことを望み、繁より簡に入らんことを望む。」（『写生道二』、『アララギ』大正七年十月第十一卷第十号）と述べ、一心を集中して捉えた対象の中核を、単純な形で表現すべきとしている。赤彦は「外簡にして内に深からんとする修養が東洋人を鍛錬的に馴致した事は東洋思想を考へる上に必ず見通してはならぬ」（『信濃教育』大正八年一月号）要点であるといつて「鍛錬道」を教育や短歌の上にも導入した。

「鍛錬道」ということを積極的に唱えだしたのは大正八年頃からで、「鍛錬道は集中道であります。」（『萬葉集の系統』大正八年十月）といい、「多岐な心を或る一点に集中する事に依つて」（同上）可能であり、それを表現させるには、日頃の「鍛錬」が必要だと説いている。こうして写生概念を深化させたのは、赤彦本来

の作歌態度と、その生き方に深く根ざしたものであつた。

写生説と平行して、赤彦は万葉尊重を説くことを忘れなかつた。大正三年六月から『アララギ』誌上に「萬葉集短歌論講」を載せ、同五年三月には万葉会を結成し、四月以降毎月三日間高島尋常高等小学校で万葉の講義を行ない、その後豊平・長野でも月々行なうなどその活動には、万葉主義を鼓吹するに目ざましいものがあつた。『アララギ』（第十二卷第一号）大正八年一月号で、「アララギ」は「歌に於て一途に万葉集を尊信する。」と声明し、「萬葉集は民族的の歌であります。日本民族全体が赤裸々になつて膝を交へてお互いに人間としての共通した感情を有りのままに歌つて居ります。」（『万葉集の系統』大正八年十月）と第一の特徴を上げ、万葉集の「いのち」は、「内面から言へば、『全心の集中』であり、外面から言へば『直接の表現』であります。」（前同）という。さきに引いた「一心の道」でも、「萬葉集の作者は、どんな事柄に対しても苟も歌ふとなれば、何処迄も真面目に正面から其の対に向つてゐる。さうして一心をそれに集中してゐる」と説かれている。

赤彦は「妹が門見む、靡けこの山」（人麿）や「庭に立ち麻を苜り乾しししぬぶ東少女を忘れ給ふな」（常陸娘子）などの歌は「感情が一点に集中されて、表現にびたりと行つてゐる」例として掲げているが、万葉の歌が民族的な感情を真率に表現しているという赤彦の見解は首肯できても、万葉の歌人達が一心を対象に集中することができた—いわゆる鍛錬道としての意味で—としたのは、はなはだ妥当性を欠くものであるといわざるを得ない。だが、古今調を「大宮人の生ま温るき気分」の現れであるとして斥け、万葉調を「萬葉人の気迫の現れである」と解し「心と形が厳密に合致し、夫れが強力なる意志を以て貫かれてゐる」（『萬葉調』大正八年五月、『アララギ』第十二卷第五号）と述べ、子規以来の写生主義拡張の目標として、万葉集に学ぼうとした姿勢は高く評価されるべきであろう。

こうして万葉尊重と写生説とが二本の根本となる柱として打ち立てられたのである。では、以上のような赤彦の志向は、作品の上でどのように実現されたので

あろうか。

六

赤彦の第三歌集『氷漁』は、大正九年六月十五日、大正四年から同九年前半に至る作より八百四十二首を収録して「アララギ叢書第八篇」として刊行された。『氷魚』の大正四、五年頃のものは、八丈島で心境の打開を得たにもかかわらず、『切火』のあとをひくものがあり、なお十分に赤彦本来の歌風は定まっていないうらみがある。

まさびしく思ひぞ至る一ぼんの松のかぶれる雪深からむ

(「窓外春雪」 大正五年)

しらしらに障子白みて牛乳の車の音す疲れし頭に

(「朝顔の花」 大正四年)

あきらめてゐるものゆゑに暁の時のま吾れの心よりも

(「あかつき」 大正五年)

瘠せたりとこのごろ思ふわが足を布団のなかに動かし見るも

(「はふ薦」 大正五年)

などの歌からは、煩雑な都会生活に疲れきつた赤彦の姿をうかがうことができる。久方振りに信州に帰郷した折には、

はるばるに帰り来りて戸を叩き梅雨の草家の眠りは深し

闇のなかに厚き大戸を叩きけり何故に心怯るるならむ

父と子と顔あらひ立つ桑のかけ別るることは思ふに堪へず

(「妻と子」 大正四年)

と詠んでいる。一応の落ち着きを取戻してきているが、「心怯るる」「思ふに堪へず」など弱々しく感傷的な気分がにじみ出ている。題材や発想に新しさを求めて、

職人のふところの中ゆ眼あき職人の顔を仔犬は知らず

(「貫はるる仔 犬」 大正四年)

雪隠に「阿仁」はからんやわが子ども乃木大将の唄うたひ居り

御山には雪かあらむと物言ひし行服の少女居眠りするも

(「御嶽請社」 大正五年)

というような歌も作られた。「仔犬」、「幼児」、「少女」の純真で無垢な姿に興味を覚えて詠んだもので、素朴なものを愛してやまない赤彦の心情は察することはできても、作品としては優れたものとはいえない。やがて『馬鈴薯の花』、『切火』に見られた浪漫的なものや色彩的なものは影を消して、現実の生活に目をむけ、素朴で地味な歌が目立つてくるのである。赤彦の目の注がれるところはなんといつても人事詠よりも自然詠の方が多く、赤彦の特徴でもあるが、例えば

ぽっかりと朝の曇りに花をひらく紅蓮華こそ大きかりけれ

(「蓮の花」 大正四年)

萱の芽の青葉の伸びて踏みのぼる春の円山はおもしろきかも

(「春の山」 大正五年)

という作は「一心の集中」や「単純化」を力説する写生道にはほど遠く、描写がくどすぎきらいがある。後に赤彦自身「氷魚の前半などは特に単純化せざるもの多きを感じ居り候」(菅沼知至宛書簡、大正十年五月二十七日)といったのも、うなずけるところである。しかし、この頃から赤彦本来の世界が沈潜しより充実してくるようになる。

闇のなかの雨の音澄み降りしきる草家ぬちのけはひは聞ゆ

(「妻と子其一」 大正四年)

青空の遠くに著き山ひとつ雪をいただき輝きてあり

(「妻と子其二」 大正四年)

雨やみし露のしづくの草明りすかんぼの穂の長く伸びたり

(「妻と子其四」 大正四年)

これらの歌は、自然に対して心を潜め、「深く事象の微動に触入せんとする」写生の構えがある。この写生の方法によって、都会の風物も次のように詠みこまれた。

ふり仰ぎ秋の月見れば縁日の灯のうへの空の雲は早しも
赤あかと月は(欠ける)たり縁日の灯のなかにして尺八聞ゆ
久方の月の夜にして縁日の灯のいろうつる雲は久しも

(「縁日」大正四年)

都会における縁日の賑わいの中に、例えば「灯のいる」に映える「雲」のこもし
出す趣を的確に据えた視覚には確かなものがあり、都会的な風情よりも、それを
包んでいる自然に対して沈潜した心を向けているところは、赤彦の特色であろう。

『氷魚』の巻頭に据えられた

春雨のなかより見れば葦原の奥つ山には雪降りたり

枯芝原よべ降りし雪のとけしかば辛夷の花は雫してあり

道の手に村は見ゆれど家の子は春山樵りに行きにつらむか

(「山国の春」大正四年)

という歌は、広丘、玉川時代における情緒的、動的な作風と比較すれば、大きく
変貌している。つまり、広丘、玉川時代の「静的」「瞑想的」な作風に帰った感も
しないではないが、穏やかな詠みぶりは、歌集『氷魚』の基調をなすもので、本
格的な写生を構築していくのである。

絶え間なく風にゆるる栗の毬にうら群れている燕は飛ばず

(「雛燕」大正五年)

風のなか起きかへらむとする枝の重くぞ動く青毬の群れ

燕立つときとはなりぬ湖の青山の雲の寂しき真昼ま

故さとの湖を見れば雛燕青波にまひ夏ふけにけり

(「雛燕」大正五年)

のような佳作も数多く生み出された。「風」「ゆるる」「動く」「まひ」などの動的
なものの中に「毬」「燕」「枝」などを鋭く観察した上で、緊密重厚な格調で詠い
上げているのは「物及び現象の中核に潜み入」っていることを示し、中村憲吉は、
この一連について「歌が締って来た事」を指摘し、「事象をつかむ威力」(「赤彦

の歌を評す」大正五年)の出でたことを高く評価している。『氷魚』の作品は、
大正六年頃から最も充実し、いわゆる赤彦調と呼ばれる歌風の基盤を確立したも
のといっているであろう。秀歌と目すべきものを抄出すと、

時の往きひまなきものか一つ木の雪のなかなる幽けき光

(「わかれ」大正六年)

通り風すぎて木擦れの音すなり技々ふかく交はせる赤松

(「榎松」大正六年)

せきれい谷川に石うつりする請駕の動きめ曇るこの項昼かも

(「岩手以外」大正六年)

温泉に入りて一夜ねむり沓陸奥の山の下なる入海の音

(「湊虫」大正六年)

縁側の竹の柱の冷やひやと夜ば更けにつづ近き川音

(「福島」大正六年)

など気魄のこもった力作が多い「アララギ二十五年回顧」大正五年の項で、茂吉
が「作歌に於ては、前年もさうであった如、特に本年度に於ける島木赤彦の活躍
は非常であった。そしてその数に於て他の同人の約二倍ぐらになつてゐる。」と
述べているように、この努力が結実したのである。

通り雨すぎて明るし赦土道の・倭松の花のしめりた石見ゆ

(「梗ヶ原」大正七年)

火をたきて烟こもれる窓さきの柿のわか葉はいくらものびず

(「高木の家」大正七年)

岩山におほひかぶさる雨雲の雨脚平らに降りつつあり

(「岩山」大正七年)

以上のように、二句切れの句法を用いて到健な調べの歌が多く、一心を集中し
て対象に迫る態度は、写生の技法をあますところなく生かして赤彦独自の風格を
示し、叙情詩としての短歌の一つの極限を示してゐる(「北住敏夫」『写生派歌人の

研究』)のである。『氷魚』の末年には、「諦めに似た心が、底の方に潜んでゐたやうである」(『太虚集』巻末記、大正十三年十月十五日)と、赤彦は述べている。そのような心境からは、

ただ一つ小さき火鉢置かれた力手のひらあぶれば手のうらさむし

(「校正室」大正七年)

おのれ盛りて飯を食へおり窓の曇りいよいよ曇りてみぞるる音す

(「番町の家一」大正七年)

訪ぬべき人人の家もなしこの宿のはさみを借りて爪を切り居り

(「池田村」大正八年)

汽車のうちに夕べ聞ゆる山の田の蛙のこゑは家思はしむ

(「紫雲英」大正八年)

と詠まれ、調べも和らぎ感情の動きは、よりひそやかになつてきている。木下利玄は、二首目の歌を取り上げて「中から迸るリズムが強くなりひびいて歌の調子を高いものにしてゐる」(『氷魚を読みつ』)『アララギ』大正十年三月号一と述べているが、この傾向は叙景的な歌にも認められる。

はやて風砂吹さつくる銀杏の樹幹太くして芽ぶきおくれつ

(「番町」大正八年)

土荒れで石ころおほきこの村の坂にむかひて入る日のはやさよ

(「冬の日」大正九年)

つぎつぎに氷をやぶる沖つ波濁りをあげてひろがりてあり

(「氷湖其二」大正九年)

自然蟹照の深さ、表現の確かさは、いうまでもなく赤彦の力量を示すもので、重厚な詠みぶりのなかに対象を的確にとらえている。さらに、幼少から病弱であった長男政彦を大正六年の暮に喪つた際に詠まれた一連は、近代における秀逸な挽歌である。

むらぎもの心しじまりて聞くものかわれの子どもの息終るおとを

玉きはる命のまへに欲りし水をこらへて居よと我は言ひつる

田舎の帽子かぶりて来し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず

ゆくものは止まることなし護国寺の冬木の森に日は間なく照るも

あわただしく命はゆきぬわが家の窓に日あたりきのふのごとし

(「逝く子」大正六年)

不断から、赤彦は歌をまとめ上げるのに多くの時間を費す方であったが、特にこの一連の作品を完成させるのに実に一年半あまりを要し、「自己を中心とする人事現象は、自己の感動が強烈であるため、その強烈な感動作用から作歌の熱意作用に至るまでに余計に時間を要する。」(「短歌に於ける人事と自然」大正八年九月『アララギ』第十二巻第九号)と述べている。すなわち感動を簡単に表現しては感傷に流れてしまふ恐れがあるので、その真情を正しくとらえ、かつ生かそうとしたのであった。そこで表面的には感動の勢がないように思われるとはいへ、できるだけ主観をおさえた厳肅な詠みぶりの中から、愛児を喪した親のたとえようもない悲痛さが哀韻となつて響いてくるのである。「逝く子」一連について木下利玄は「自然の真を深く見」る眼をもつて人事に對することによつて到達した「絶唱である」(『氷魚を読みつ』)『アララギ』大正十年三月)と賛美し、釈超空も「新挽歌の模範となるもの」(「逝く子評」『アララギ』大正十年三月)と絶賛したのである。

七

『氷魚』に続く第四歌集『太虚集』は、大正三年十一月八日、「アララギ叢書第十八篇」として、大正九年後半から十三年前半までの作四八五首を収録して刊行された。この間のことを赤彦は「この四年間は、信濃山中にある家族が打揃つて健康であり、平和な生活をつづけることが出来た。これは小生として今までに珍しいほどのことである。」(『太虚集』巻末記、大正十三年十月)といつてゐるように、大正九年三月限りで、約三年間にわたつて携わつてきた『信濃教育』の編集主任を辞し、年齢からみても四十代の後半期に入つて、ようやく心の落着きを得、それとともに歌も円熟してくるのである。しかし、そのような赤彦として

も内外の情勢には敵しいものがあつた。『アララギ』に対する風当りは、ますます強く、白秋、水穂、夕暮などを向うにまわして、盛んに論陣を張ることになり、さらにその上に「アララギ」内部においても、赤彦のやり方を快しとしないで批判する向もあり、「争ひを我に止めよといふ人あり自らにして至る時あらむ」(大正十三年)という歌に決意のほどを示しているが、ついに大正十三年四月、北原白秋を中心として『日光』が発刊されるやいなや、「アララギ」創刊以来の石原純、小泉千樫、釈超空の三名がこれに加わり、赤彦らとは異なる道を歩むこととなつた。『日光』創刊の言葉には「私たちはいまこの日光のもとに相集まり相睦び、日光の暖かさに慕浴しながら、私たちのたづさはる芸術分野に楽しき空気を息吸はうとしてゐます。」とあり、新しい抱負を述べているが、赤彦には『日光』創刊の宣言は皆アララギに対して言うて居る」(結城哀草果苑書簡、大正十三年六月二日)と考えられ、「アララギ」外の歌人、ほとんど全部を包含した総合的な短歌雑誌として出発した『日光』は、茂吉が言うように「第一流歌人の力量を聯合して以てアララギに当らう」(「アララギ二十五年史」)としたものであつたと考えられる。とにかく、この事件によって赤彦を中心とする「アララギ」派は、動揺することもなく、かえつて内部的結束を強めていくこととなつた。

この間の赤彦は、しばしば旅に出たが中でも大正十二年十月、南満州鉄道の招待によって遠く満州の地へ赴いたことは、素材として旅先で得たものも多く、作歌の上での収穫となつた。そして童謡にも力を往きながら、『万葉集』の研究にも興味を示し、自ら筆写、校訂をした『万葉集燈』、『万葉集僻案抄』、『万葉集榎落葉』を『万葉集叢書』の一部として刊行するなど、万葉学発展にも寄与したのである。なお、大正十三年四月に発表した『歌道小見』は一種の入門書として書かれたとはいへ、赤彦歌論の精髓を余すところなく呈示するものであつた。大正九年後半から十三年前半までの、いわゆる『太虚集』の時期に入り、故郷での「平和な生活」によって安らかな心境を得た赤彦は、日常詠にも、そういう心境を詠っている。

寂しめる下心さへおのづから虚しくなりて明し暮らしつ

(「このころ」大正十年)

時雨ふる昼は囲炉裏に火を焚きぬこの寂しさを心親しむ

(「茅のうち」大正十年)

暑き日のま昼まにしてもの書かむ心のそのしまし澄みつる

(「柿蔭山房」大正十一年)

野分すぎてとみにすずしくなれりとぞ思ふ夜半に起きるたりける

(「またの日」大正十一年)

というように寂しさの心は、赤彦が今までにもしばしば詠んでいたものであるが、「この寂しさを親しむ」と歌っているところは、充足と余裕さえ感じられ、広丘時代の孤独を味わい楽しんでいた境地を思わせるが、かつての浪漫的な雰囲気も消えて、「おのづから虚しくなり」内省的になっている。ここに至ると赤彦のいう人生の「寂寥所」、「幽寂境」にもかようなものがあり、歌集名を『太虚集』と名付けたのも、うなずける。

稚子の心はつねに満ちてあり声をうらあげて笑ふ顔はや

(「生くるもの」大正十年)

福寿草の蒼いとほしむ幼な子や夜は囲炉裏の火にあてており

福寿草の鉢をおきかふる幼子や縁がはのうへに移る日を追ひて

(「しはす」大正十年)

これらの歌では無心な「幼子」の姿を暖かく見守りながら、赤彦自身も明るく和んでいようであり、このような境地を「円融具足の相」(広告文、大正十四年)とでもいうのであろうか。『太虚集』の中で、異色のものに「関東震災」(大正十二年)と題する一連がある。その中には、

灰原をふみつつ人の群れゆけり生きたるものも生けりともなし

焼け舟に呼べど動かぬ猫の居り呼びつつ過ぐる人心あはれ

焼け跡に霜ふるころとなりけり心に沁みて澄む空のいろ

などがあり、震災の凄さが実感となつて読む者に迫ってくるのは、赤彦が現実を的確に把握したからに他ならない。こういふところに茂吉は「凝つと感動を抑へて、その核心を表現しよう」と努力し、「多年の鍛錬によつて、兎すべからざることを免さずに捉へ」「もはや上手の域に達している。」(『アララギ』赤彦記念号)と赤彦の力量を認めているのである。次に満州に旅行した折には、

行きゆきて寂しきものか国原の土に著くす低き家むら
(「満州」大正十二年)

枯原の夕日の入りに車ひく驢馬の耳長し風に向
(「奉天北陵に詣つ」大正十二年)

草枯れの国のはたての空低し褪せつつのこる夕焼の雲
(「二十三日長春に向ふ」大正十二年)

あからひく光は満てりわたつみの海をくぼめてわが船とほる
(「二十九日大連出帆」大正十二年)

というように大陸の異国的で独特な景觀を手堅く写生した作品があり、旅人としての寂寥感も、つきつめられていて「一種荘嚴な響を持つものとなつて出現して居る」(茂吉「赤彦記念号」)のである。赤彦の本領が充分に發揮されるのは「太虚集」においても、やはり自然詠を対象とした歌である。

赤松の林のなかの苔深し洩れつとほる光の幽けさ

(「松林」大正十年)

小禽采てひそけきものか土の上に茨の赤を食みこぼしたり

(「小寒」大正十一年)

空登みて寒きひと日やみづうみの氷の裂くる音ひびくなり

(「高木村落」大正十二年)

ここにして遙けくもあるかたくれてなほ光ある遠山の雪

(「巖温泉」大正十二年)

みづうみの氷はとけてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

(「諏訪湖畔」大正十三年)

白雲の下りぬ沈めるたにあひの向ふに寂しかつこうの声
(「山の湯」大正十三年)

いずれの歌も『太虚集』中、自然觀照の確かさと感覺的印象の鮮明さにおいて屈指の佳作であろう。「全心を集中」し、「表現の單純化」を心がけた赤彦一流の世界を現出しつくした觀があり、しかも透徹した心持がしみわたつていて、人間性を超えて自然に参入しようとするところに赤彦の究極の理想があつた。

八

さて赤彦の終生の力作と見られるものは、大正十四年帰国した茂吉を迎えて、共に木曾氷ヶ瀬に遊んだ折に競詠の形でよまれた「高山國の歌」(三十五首)であり、その少し後で作られた「峡谷の湯」(四十二首)とである。まず「高山國の歌」を一瞥すると、

踊り止みて静かなる夜となりにけり町を流るる木曾川の音

岩あひにたたへ静もる青淀のおもむろにして瀨に移るなり

霧はるる岩より岩にあな寂し傾きさまに桶をかけたり

石楠花は寂しき花か谷あひの岩垣淵に影うつりつつ

谷川の早滞のひびき小夜ふけて慈悲心鳥は鳴きわたるなり

赤彦はこの山行について、さきにも引いた「幽寂境」の中で「木曾街道から王瀧川に沿つて峪間に入ること七里ばかりである。峪の岩間に石楠花が咲き、川は、潭となつて紺碧を湛へ、瀨となつて山に響いてゐる。」「老は枯ではない。寂は渴ではない。木曾山の木は生き、水は流るるゆゑに、山と、樹と、水と、石と相依つて幽寂境を成し得てゐるのである。」と記しているが、その情景を如実に歌にしたのが右の一連であり、茂吉が二首目の歌について、この写生の手法というものは「主觀ともつかず客看でもなく、自由自在にして確實至極のものである。」と讚賞し「中核にすみ入る、或は実相に觀入するといふことは実行の例を示すならば、まづこの歌の如きをいふのであらう。」(以上アララギ第二十九卷第十号昭和十一

年)といっているように「幽寂境」への志向が、ついに奥深い景致を現出するに至ったのである。一方茂吉は赤彦と同じ谷川の景色を見、鳥の声をきき、こもり波あおきがうへにうたかたの消えがてにして行くはさびしゅう

山路来て通草の花のくろぐるとかなしきものをなぞか我がせむ

さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑ聞けば光にむかふこゑならなくに

と歌っている。ここで両者の歌を「さびし」という語に注目し比較すると、赤彦が石楠の花を「寂しき」と形容して「幽寂境」ともよぶべき自然に参入し、ひたっているのに対し、茂吉はうたかたについて「さびしゅう」と言いながらも、さらに心の奥から湧きおこる生の響きといったものを感じとっているのである。この両者の異質な趣は、赤彦の写生が対象の生命をやがて自己の生命としてとらえるところにあるのに対し、茂吉のそれは、実相観入によって「自己・一元の生を写す」(「短歌と写生一家言」大正九年九月)という、すなわち、自己の内なる生そのものをとらえるところにあることからきているのである。

驚きて山をぞ仰ぐ雲の中ゆあらはれて見ゆ赤崩えの山

什れ木にあたる早滞の水も見つ寂しき過ぎて我は行くなり

谷かげに苔むせりける什れ木を息つき朔ゆる我老いにけり

奥山の谷間の梅の木がくり水沫飛ばして行く水の音

と詠まれた「峡谷の湯」一連は、『太虚集』について、「齢五十に近づいて漸く簡古老蒼の域に入り圓融具足の相を備へ」(『広告文大正十四年』)と赤彦自ら記しているような心持によって山川に交り、自然をみつめることで「人間の生命が自然の生命と合するに至」(大正十一年アララギ「編輯所便」)り、自然に随順しきつたものの姿と、一種の東洋的な生き方の極地を示しているように思われる。大正十四年五月、赤彦は諸家にならつて自選歌集『十年』を出版するはこびとなり、十一月には『萬葉集の鑑賞及び其批評(前編)』を完成させたが、この頃から神経痛や胃病に悩まされ、さらに悪いことには大正十五年一月、胃癌との診断を受けた。いくばくもない余命と知りながらも「萬葉鑑賞の後篇と萬葉研究卷一二位は

目鼻つき可申か」(平福百穂宛書簡、大正十五年一月二十四日)と完成させることを最後まで念じていたが黄痘を併発して、大正十五年三月二十七日、自宅の柿蔭山房において没した。享年五十一才。

おわりに

赤彦の行き着いた世界を知るために、絶唱ともいうべき最後の病床吟(大正十五年)〈没後遺歌集『柿蔭集』所収〉の中から何首かを抜いてみる。

みづうみの氷をわりて獲し魚を日ごとに食らふ命生きむため

寒鮒の頭も骨も噛みにける昔思へば衰へにけり

或る日わが庭のくるみに囀りし小雀来らず冴え返りつつ

隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり

信濃路はいつ春にならん夕日入りてしまらく黄なる空のいろ

箸をもて我妻は我を育めり仔とりの如く口開く吾は

などのようにいずれも自然に流露した詠みぶりは、一首一首が心に沁み透るところがあり、病苦のなかにもかかわらず、神経は鋭く研ぎ澄まされ、しかもものびやかで、最後の一首などは「純粋無雑不二途の童心」さえ感じられるものである。茂吉からこの一連の作は「和歌の極致に達したものばかりである。」と評され、特に五首目を「生に対する絶望のこゑではない。絶望でないからとげとげしくなつて無限の音韻が其処から生じて来る。」(「島木赤彦」昭和十一年十月)歌であると嘆賞された。ここに到つて赤彦の目ざしてきたもの、歌人としての資質がいかに発揮され成就したものである。以上の歌は「恙ありて」と題し、『柿蔭集』に収められている。『柿蔭集』は、赤彦の最終歌集であり、没後遺歌集として大正十五年七月「アララギ叢書」第三十二編として刊行された。

阿部次郎が「赤彦君追懐」と題して『柿蔭集』の最後の境地を「赤彦君はその最後の歌に於いてその道の一つの絶頂に立つてゐた、赤彦君は五十年の生涯に於いて一つの道を行きつくした。」(『アララギ』「島木赤彦追悼号」大正十五年十月)と述べているところに赤彦に対する評価は帰結するのである。